

『愛玩動物看護師カリキュラム準拠教科書 6 巻
動物行動学/愛玩動物学/比較動物学』（改訂第 2 版第 2 刷）
訂正とお詫び

掲載記事中、以下の記述に誤りがございました。ここに訂正させていただくとともに読者の皆様および関係者の方々に深くお詫び申し上げます。

株式会社 EDUWARD Press

2024 年 6 月 26 日

頁	記事タイトル	該当箇所	誤	正
p. 52	動物行動学 第 3 章 社会行動	威嚇および服従の 行動様式 本文右段 上から 4 行目	敵対的行動	敵対行動
p. 57	動物行動学 第 4 章 行動発現の しくみ	ローレンツの心理 水力学モデル 本文左段 下から 1 行目	接触行動	摂食 行動
p. 90	動物行動学 第 5 章 行動の発達 と学習	図 1-5-6 オペラント条件づ けの強化と罰	図内 A 正の強化（ほめる） 行動は増加（ボールを取 ってくる行動が増える） B 正の罰（叱る） 行動は減少（靴をかじる ことが減る） C 負の罰（よいもの[おや つ]がなくなる） 行動は減少（「オスワ リ」の合図に従わない頻 度が減る [=従う頻度が増 える]）	図内 A 正の強化 行動は増加 B 正の罰 行動は減少 C 負の罰 行動は減少 D 負の強化 行動は増加 ※別紙より修正後の図を

			D 負の強化（嫌な[怖い]侵入者が去る） 行動は増加（侵入者に対してより吠えるようになる）	ご確認ください。
p. 218	愛玩動物学 第3章 血統と血統書	犬・猫の血統書の歴史 本文右段 下から15行目	続いて1984年には、	続いて1884年には、
p. 231	愛玩動物学 第4章 愛玩鳥の特徴・生態・飼養管理	キーワード	カロリー：タンパク比	タンパク質/エネルギー
p. 237	愛玩動物学 第4章 愛玩鳥の特徴・生態・飼養管理	4. 飼養管理 ここがPOINT 上から2行目	カロリー：タンパク比	タンパク質/エネルギー
p. 238	愛玩動物学 第4章 愛玩鳥の特徴・生態・飼養管理	セキセイインコの場合 本文右段 下から1行目（赤い文字）	カロリー：タンパク比	タンパク質/エネルギー
p. 239	愛玩動物学 第4章 愛玩鳥の特徴・生態・飼養管理	セキセイインコの場合 本文左段 下から7行目	カロリー：タンパク比	タンパク質/エネルギー

p. 239	愛玩動物学 第4章 愛玩鳥の特 徴・生態・ 飼養管理	オカメインコの場合 本文右段 下から2行目	カロリー：タンパク比は 62.5g/calとなる。	タンパク質/エネルギーは 62.5g/Mcalとなる。
p. 239	愛玩動物学 第4章 愛玩鳥の特 徴・生態・ 飼養管理	表2-4-1 1行目	カロリー：タンパク比	タンパク質/エネルギー
p. 239	愛玩動物学 第4章 愛玩鳥の特 徴・生態・ 飼養管理	表2-4-1 2行目	最小 (g/cal) 最大 (g/cal)	最小 (g/Mcal) 最大 (g/Mcal)
p. 240	愛玩動物学 第4章 愛玩鳥の特 徴・生態・ 飼養管理	オカメインコの場合 本文左段 上から3行目	カロリー：タンパク比は 31~41g/calとなり、	タンパク質/エネルギーは 31~41g/Mcalとなり、
p. 240	愛玩動物学 第4章 愛玩鳥の特 徴・生態・ 飼養管理	栄養要求量の決定 方法の結論 本文左段 下から16行目	手順2 カロリー：タンパク比	手順2 タンパク質/エネルギー
p. 241	愛玩動物学 第4章 愛玩鳥の特 徴・生態・ 飼養管理	ビタミンの添加 本文左段 上から10行目	カロリー：タンパク比	タンパク質/エネルギー
p. 244	愛玩動物学 第4章 愛玩鳥の特 徴・生態・ 飼養管理	演習問題 問2 F	カロリー：タンパク比	タンパク質/エネルギー

p. 246	愛玩動物学 第4章 愛玩鳥の特 徴・生態・ 飼養管理	解答 問3 下から2行目	カロリー：タンパク比	タンパク質/エネルギー
p. 362	比較動物学 第1章 産業動物 6. 牛に多 い疾病 乳 房炎	本文右段 上から4 行目	乳頭を刺激すると脳下垂 体前葉からオキシトシン が～	乳頭を刺激すると下垂体 後葉からオキシトシンが ～
p. 446	比較動物学 第1章 産業動物 第1章6 鶏	図3-1-6-5 鶏の消化器 図の解説文	7. 空腸	7. 回腸
p. 476	比較動物学 第2章 実験動物 第2章1 実験動物学 総論	動物実験の結果を 左右するもの 本文左段 下から15行目	$R = (A+B+C) \times D + F$	$R = (A+B+C) \times D + E$
p. 530	第2章 実験動物学 演習問題	問2 選択肢②	②実験動物の基本体系を 構築したのはフランスの クロード・ベルナードで ある。	②実験動物の基本体系を 構築したのはフランスの クロード・ベルナールで ある。

	提示操作	除去操作
報酬刺激	<p>A 正の強化 行動は増加</p> 	<p>C 負の罰 行動は減少</p> 
嫌悪刺激	<p>B 正の罰 行動は減少</p> 	<p>D 負の強化 行動は増加</p> 

図1-5-6 オペラント条件づけの強化と罰

オペラント条件づけの結果として行動が増加することを強化、逆に減少することを罰と呼び、それぞれ提示か除去かという操作の違いにより、正と負に分類される。